

論文

韓国独居高齢者のセルフ・ネグレクトと自殺念慮の関係

鄭 熙聖[†]

要約：本研究の目的は、韓国における独居高齢者のセルフ・ネグレクトと自殺念慮の関係を実証的に検証することである。A市に所在する老人見守り基本サービスの遂行機関3箇所を利用する高齢者に対して調査票を用いた個別訪問調査を実施した。高齢者のセルフ・ネグレクトと自殺念慮との関係を構造方程式モデリングで分析した結果、その因果関係モデルのデータへの適合度（CFI=0.940, RMSEA=0.055）は統計学的に許容できる範囲であった。高齢者の自殺念慮に対してセルフ・ネグレクトが統計学的に有意な正の関連性（0.407, $p<0.001$ ）を示し、セルフ・ネグレクト状態の程度が高いほど自殺念慮の程度が高いことが明らかになった。考察では、本研究の結果に基づき、高齢者の自殺問題を解消するためのセルフ・ネグレクト予防の重要性について議論した。

キーワード：韓国独居高齢者, セルフ・ネグレクト, 自殺念慮, 構造方程式モデリング

目次

1. 緒言
2. 研究方法
 - 2-1. 調査対象とデータ収集
 - 2-2. 調査内容
 - 2-3. 解析方法
3. 研究結果
 - 3-1. 調査対象者の属性分布及び属性による主要変数の差異検証
 - 3-2. セルフ・ネグレクト尺度と自殺念慮尺度の妥当性・信頼性の検討結果
 - 3-3. 高齢者のセルフ・ネグレクトと自殺念慮の関連性
4. 考察

1. 緒言

韓国での高齢化率は2018年に14.4%に達し、今後も急速な高齢化が予想されている。2019年度の65歳以上の高齢者のいる世帯は全世帯の21.8%であり、65歳以上の高齢者のいる世帯のうち単身世帯は34.2%と最も高い割合を示している（統計庁

[†]同志社大学大学院社会学研究科助手

*2019年12月26日受付, 2019年12月26日掲載決定

2019)。このような状況から、近年高齢者を取り巻くセルフ・ネグレクトが懸念されている。韓国の中央老人保護専門機関（2016:27）の「2015 老人虐待現況報告書」によると、高齢者虐待件数は2005年に3,481件であったが、2015年には6,154件と著しい増加を示した。このうち、セルフ・ネグレクトの発生件数は2005年に36件（虐待全体の1.0%）であったが、2015年には622件（虐待全体の10.1%）に達し、高齢者虐待類型に占める割合が飛躍的に増加した。

韓国では119万人の高齢者単身世帯のうち、孤独死危険群に属する世帯数が約30万人に達すると報告されている（保健福祉部2012）。高齢者単身世帯は、他の高齢者世帯に比べて、より孤独を感じ、困窮者と欠食者が多く、何らかの健康上の問題を抱えているという（鄭2015:4）。なお、過去10年間にわたって、韓国の自殺率はOECD諸国の中で最も高くなっており、2012年時点では10万人当たり29.1人であり、日本では20.9人、アメリカでは12.5人である。特に、韓国での65歳以上の高齢者の自殺率は2013年に10万人当たり64.2人となっており、それはOECD諸国の平均12.5人の約5.1倍に相当する（統計庁2014）。このように、韓国における高齢者を取り巻く自殺は深刻な社会問題といえる。

上述した高齢者を取り巻くセルフ・ネグレクトと自殺を解消するため、韓国では2007年に「老人福祉法」が改正され、独居高齢者への支援に対する法条項が設けられた。それに基づき、韓国政府は社会サービスの形で「老人見守り基本サービス」を施行し、高危険群とみられる独居高齢者への見守りサービスが行われるようになった。李ら（2013）は、満65歳以上の独居高齢者999名への調査から、老人見守り基本サービスと独居高齢者のセルフ・ネグレクト予防との間には有意な関連があることを明らかにしている。「老人見守り基本サービス」とは、独居高齢者の生活実態及び福祉ニーズの把握、定期的な安否確認、保健・福祉サービスの連携・調整、生活教育などを通じた総合的なソーシャル・セーフティネットの構築を目的とする（保健福祉部2017:111）。

セルフ・ネグレクトの状態が続くと誰にも看取られずに自宅で死亡する孤立死のリスクが高まり（ニッセイ基礎研究所2011；斉藤ら2016）、極端なセルフ・ネグレクトの状態（特に不衛生な個人衛生）にある高齢者ほど自殺念慮（suicidal ideation）を有する傾向がある（Dong et al 2017）。孤立死（孤独死）と自殺との関係については十分な検討が行われていないが、孤立死の中に自殺を含めるか含めないかに対する意見は多岐にわたる（川口ら2013）。このため、現時点では孤立死と自殺の関係を明確に区分することは難しいと考える。自殺は「自殺念慮→自殺計画→自殺企図」というプロセスの中で発生し（O'Connell et al 2004）、注目すべき点は自殺に至る要因の一つとしてセルフ・ネグレクトが挙げられていることである。したがって、人の生命に関わる重大な社会問題ともいえる高齢者の自殺とセルフ・ネグレクトがどのような関連があるかを詳細に検討

する必要がある。自殺に至る最初の段階である自殺念慮とセルフ・ネグレクトとの関係が明確にされると、高齢者の自殺予防に向けた新たな知見が得られると推察される。

しかしながら、韓国と日本はもちろん、国際的にも Dong ら (2017) の研究以外には高齢者の自殺とセルフ・ネグレクトとの関係を実証的に検証した研究は筆者が検討する限り見当たらない。そこで、本研究では、独居高齢者に対してセルフ・ネグレクトと自殺念慮との関係を実証的に検証することを目的とする。

2. 研究方法

2-1. 調査対象とデータ収集

調査対象は、韓国の A 市に所在する老人見守り基本サービスの遂行機関 3 箇所を利用する独居高齢者である。調査は老人見守り基本サービスの遂行機関に従事する独居老人生活管理士による個別訪問調査で実施した。調査実施にあたって、独居老人生活管理士には本研究の目的と趣旨を含め、調査票の記入方法と注意事項などについて事前説明を行った。さらに調査票は無記名で実施すること、回収したデータは個人が特定できないよう処理・保管することなどを説明した上で、本調査に対する協力を得た。406 人のデータを収集し、そこから単身世帯と回答していない高齢者や欠測値を有するデータを除き、最終的に 373 人のデータを本研究の分析に用いた。調査期間は 2019 年 10 月から 11 月であった。本研究における調査は、同志社大学「人を対象とする研究」に関する倫理審査委員会の承認を得て実施した。

2-2. 調査内容

本調査では、対象者の基本属性（性別、年齢、月収、健康状態）に関する項目、そしてセルフ・ネグレクトと自殺念慮に関する尺度で構成した。セルフ・ネグレクトについては、鄭ら (2019) が開発した尺度を活用した。セルフ・ネグレクト尺度は「個人衛生」5 項目、「健康行動」4 項目、「居住環境」4 項目の 3 因子 13 項目で構成されている。セルフ・ネグレクト尺度の 3 因子二次因子モデルのデータに対する適合度は、CFI が 0.921, RMSEA が 0.065 であり、尺度の信頼性は Cronbach's $\alpha=0.803$ であった。回答は 4 件法（「全くあてはまらない」「あまりあてはまらない」「だいたいあてはまる」「とてもあてはまる」）で求め、得点範囲は 13~52 点である。得点が高いほどセルフ・ネグレクト状態の程度が高いことを意味する。自殺念慮については先行研究を基に孟 (2018) が開発した尺度を用いた。自殺念慮尺度は 6 項目で構成されており、自殺念慮に対するモデルの適合度は、CFI が 0.992, RMSEA が 0.067 であり、尺度の信頼性は Cronbach's $\alpha=0.840$ であった。回答は 4 件法（「全然あてはまらない」「あまりあてはま

らない」「だいたいあてはまる」「とてもあてはまる」) で求め、得点範囲は0~18点である。得点が高いほど自殺念慮の程度が高いことを意味する。

2-3. 解析方法

本研究では、調査対象者の基本属性の分布と基本属性による尺度の下位因子の間の差異を確認するため、頻度分析、t-test、ANOVA を実施した。なお、分析に用いた変数間の関係を検討するための相関関係分析を行い、測定尺度の信頼性は Cronbach's α 信頼性係数を算出した。高齢者のセルフ・ネグレクトを独立変数、自殺念慮を従属変数とした因果関係モデルを構築し、まず、各変数の妥当性は確認的因子分析を用いて因子構造の側面からみた構成概念妥当性を検討した。その上で、構造方程式モデリングを用いて因果関係モデルのデータに対する適合度及び変数間の関連性の検討を行った。さらに、因果関係モデルに基本属性を統制変数として投入し、モデルの適合度と変数間の関係を分析した。モデルの適合度は、適合度指標である CFI (Comparative Fit Index), RMSEA (Root Mean Squares Error of Approximation) で判定した。一般的に、CFI は 0.9 以上、RMSEA は 0.08 以下であれば、モデルがデータに適合していると判断される。なお、モデルの標準化推定値 (パス係数) の有意性は非標準化推定値を標準誤差で除いた値の絶対値が ± 1.96 以上 (5% 有意水準) であることを統計学的に有意と判断した。分析には、SPSS 25.0 と Mplus 8 を使用した。

3. 研究結果

3-1. 調査対象者の属性分布及び属性による主要変数の差異検証

調査対象者 373 名の属性分布と平均比較の分析結果は表 1 の通りである。まず、属性分布をみると、回答者の性別は、「男性」が 98 名 (26.3%)、「女性」が 275 名 (73.7%) であった。年齢は、「75~85 歳」が 219 名 (58.7%) と最も多く、次いで「65~74 歳」が 102 名 (27.3%)、「85 歳以上」は 52 名 (13.9%) であった。月収は、「5 万円未満」が 259 名 (69.4%) と全体の約 7 割を占め、次いで「5 万円以上 10 万円未満」が 104 名 (27.9%)、「10 万円以上」は 10 名 (2.7%) であった。健康状態については、「悪い」と回答した高齢者が 241 名 (64.6%) と最も多く、「とても悪い」51 名 (13.7%) と合わせて約 8 割を示した。

次に、調査対象者の属性によるセルフ・ネグレクトと自殺念慮に対する有意差を検討するため、t-test と ANOVA を実施した結果、セルフ・ネグレクトは「月収」による差が認められ、「5 万円未満 (M=1.72)」、「5 万円以上 10 万円未満 (M=1.60)」、「10 万円以上 (M=1.34)」の順であった (F=4.54*)。健康状態については、「とても悪い (M

表1 対象者の属性分布と平均比較

区分(N=373)		N	%	セルフ・ネグレクト		自殺念慮	
				M(SD)	t/F	M(SD)	t/F
性別	男性	98	(26.3)	1.73(.51)	1.26	2.17(.61)	0.83
	女性	275	(73.7)	1.65(.47)		2.11(.60)	
年齢	65～74歳	102	(27.3)	1.65(.48)	0.58	2.10(.65)	1.31
	75～84歳	219	(58.7)	1.67(.48)		2.16(.60)	
	85歳以上	52	(13.9)	1.74(.45)		2.01(.52)	
月収	5万円未満	259	(69.4)	1.72(.46)	4.54*	2.19(.59)	5.72**
	5万円以上10万円未満	104	(27.9)	1.60(.50)		2.00(.63)	
	10万円以上	10	(2.7)	1.34(.51)		1.71(.52)	
健康状態	とても良い	3	(0.8)	1.33(.57)	7.31***	1.88(.91)	10.24***
	良い	78	(20.9)	1.46(.46)		1.88(.56)	
	悪い	241	(64.6)	1.72(.46)		2.13(.58)	
	とても悪い	51	(13.7)	1.77(.51)		2.46(.60)	

* p<.05, ** p<.01, *** p<.001

* %は四捨五入のため、100%にならない場合がある

表2 各変数間の相関関係

因子	1	2	3	4
1 個人衛生	1			
2 健康行動	.723**	1		
3 居住環境	.654**	.666**	1	
4 自殺念慮	.337**	.405**	.312**	1

**, 相関関係が0.01水準で有意である。

=1.77)], 「悪い (M=1.72)」、 「良い (M=1.46)」、 「とても良い (M=1.33)」 の順でセルフ・ネグレクト状態の程度が高く現れた (F=7.31***)。なお、月収による自殺念慮は、「5万円未満 (M=2.19)」、 「5万円以上10万円未満 (M=2.00)」、 「10万円以上 (M=1.71)」 の順で、月収が少ないほど自殺念慮の程度が高いことが確認された (F=5.72**)。健康状態は、「とても悪い (M=2.46)」、 「悪い (M=2.13)」、 「良い (M=1.88)」、 「とても良い (M=1.88)」 の順で、健康状態が良くないほど自殺念慮の程度が高いことを確認できた (F=10.24***)。

セルフ・ネグレクト (個人衛生、健康行動、居住環境)、自殺念慮の間の相関関係分析を実施した結果 (表2) では、全ての変数の間に統計的有意性 (p<.01) が認められた。すべての相関係数は、.312～.723 の間に分布されており、.8 以上の高い水準の相関関係がみられる係数はなかった。

表3 セルフ・ネグレクト項目の回答分布

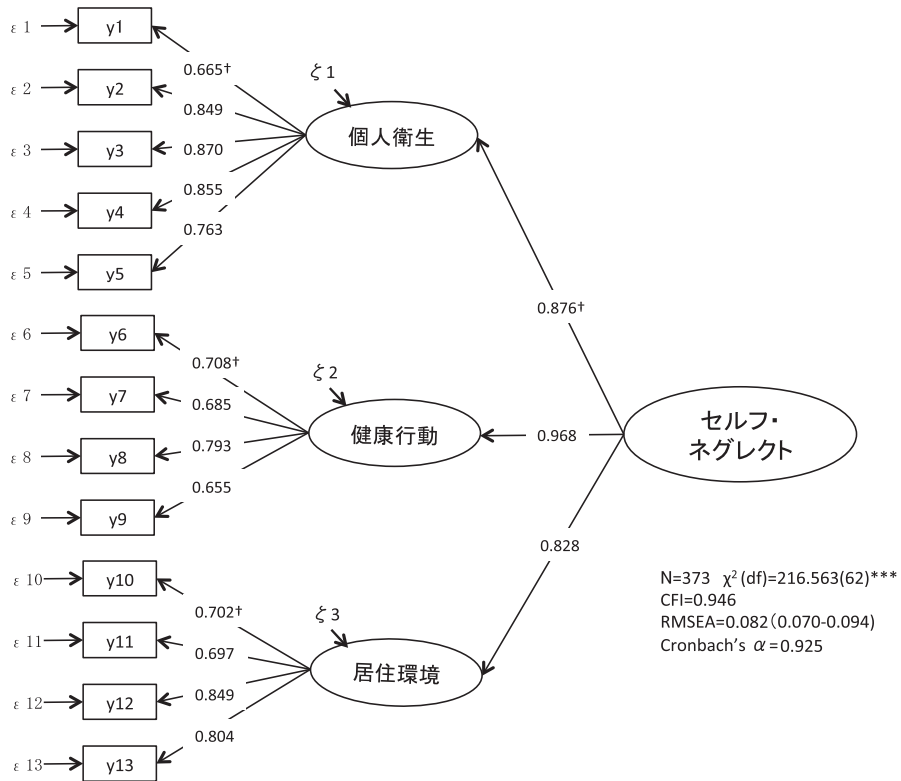
単位:名(%)

質問項目 (n=373)	回答カテゴリー			
	全くあてはまらない	あまりあてはまらない	だいたいあてはまる	とてもあてはまる
個人衛生				
y1. 毎日、手足や顔を洗わない	173(46.4)	159(42.6)	32(8.6)	9(2.4)
y2. 手足の爪を切らない	173(46.4)	181(48.5)	17(4.6)	2(0.5)
y3. 髪・ひげの整容をしない	170(45.6)	172(46.1)	31(8.3)	0(0.0)
y4. 下着の着替えをあまりしない	169(45.3)	170(45.6)	31(8.3)	3(0.8)
y5. 家の中で着る部屋着の着替えをあまりしない	139(37.3)	159(42.6)	68(18.2)	7(1.9)
健康行動				
y6. 家の中に、食べ残した物が腐ったりカビが生えたりしても、気にせず食べる	211(56.6)	146(39.1)	15(4.0)	0(0.0)
y7. 診察や治療が必要にもかかわらず、医療機関を利用しない	143(38.3)	193(51.7)	35(9.4)	2(0.5)
y8. 適切な服薬管理ができていない	169(45.3)	178(47.7)	25(6.7)	1(0.3)
y9. 保健・福祉・介護などのサービスが必要にもかかわらず、その利用を拒否している	155(41.6)	199(53.4)	16(4.3)	3(0.8)
居住環境				
y10. 家の中に、大量の物(新聞、本、缶、びん、ペットボトルなど)が散らかっている	176(47.2)	152(40.8)	39(10.5)	6(1.6)
y11. 家の中が異常に暑かったり(夏)寒かったり(冬)する	112(30.0)	176(47.2)	73(19.6)	12(3.2)
y12. 家の内外の家具・窓ガラス・ドアなどが壊れたまま、長期間放置されている	139(37.3)	196(52.5)	36(9.7)	2(0.5)
y13. 家の中のトイレ・浴室・台所・洗面台などに使えないところがある	160(42.9)	198(53.1)	13(3.5)	2(0.5)

* %は四捨五入のため、100%にならない場合がある

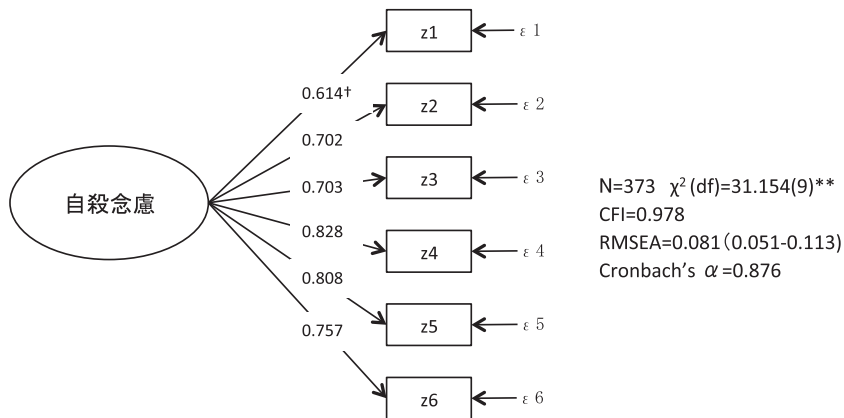
3-2. セルフ・ネグレクト尺度と自殺念慮尺度の妥当性・信頼性の検討結果

高齢者のセルフ・ネグレクト尺度の3因子二次因子モデルのデータに対する適合度は、CFIが0.946、RMSEAが0.082であった(図1)。セルフ・ネグレクト尺度の信頼性はCronbach's $\alpha = 0.925$ であり、「個人衛生」5項目では0.891、「健康行動」4項目では0.805、「居住環境」4項目では0.835であった。3つの潜在変数から13観測変数に向かうパス係数の範囲は0.655~0.870であり、すべて統計学的に有意($p < 0.001$)であることが確認された。具体的には、「個人衛生」は0.665~0.870、「健康行動」は0.655~0.793、「居住環境」は0.697~0.849であった。自殺念慮尺度の6項目1因子モデルのデータに対する適合度は、CFIが0.978、RMSEAが0.081であり、自殺念慮尺度の信頼性はCronbach's $\alpha = 0.876$ であった(図2)。潜在変数から観測変数に向かうパス係数の範囲は0.614~0.828であり、すべて統計学的に有意($p < 0.001$)であった。



注 1)モデル識別のために制約を加えたパスに+(短剣符)を付した
2) ε=誤差変数, [y数]=質問項目番号

図 1 セルフ・ネグレクト尺度の構成概念妥当性

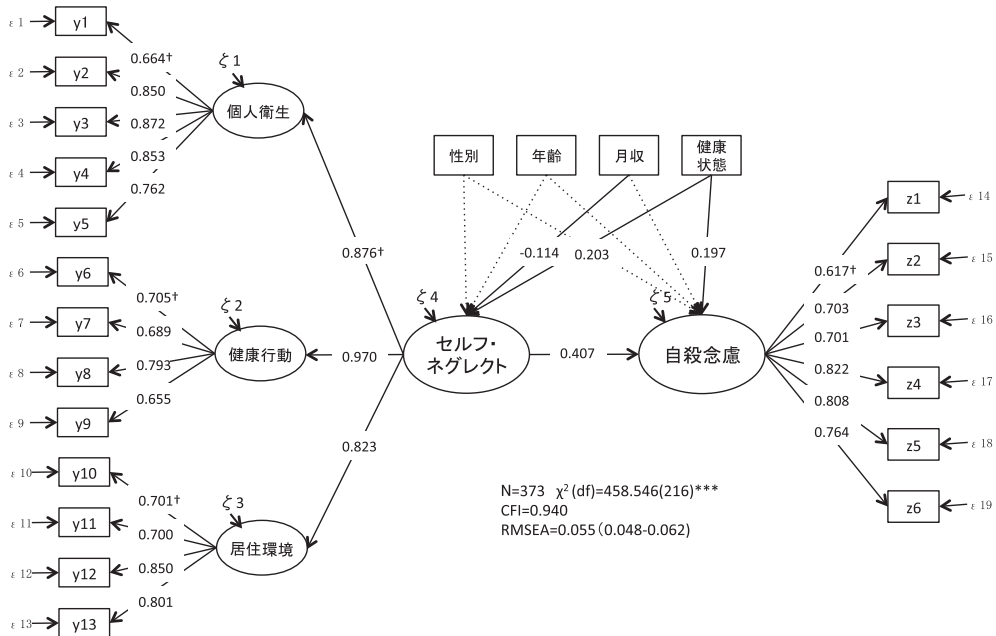


注 1)モデル識別のために制約を加えたパスに+(短剣符)を付した
2) ε=誤差変数, [z数]=質問項目番号

図 2 自殺念慮尺度の構成概念妥当性

3-3. 高齢者のセルフ・ネグレクトと自殺念慮の関連性

高齢者のセルフ・ネグレクトと自殺念慮の関係を構造方程式モデリングで分析した結果, 因果関係モデルのデータへの適合度は, CFI が 0.940, RMSEA が 0.055 であり, 因



注 1) モデル識別のために制約を加えたパスに†(短剣符)を付した
 2) 破線は非有意なパスを示す

図3 高齢者のセルフ・ネグレクトと自殺念慮との関係

果構造モデルのデータに対する適合度が許容できる範囲であった (図3)。具体的には、自殺念慮に対してセルフ・ネグレクトが統計学的に有意な正の関連性 (0.407, $p < 0.001$) を示し、独居高齢者のセルフ・ネグレクトが自殺念慮に影響することが明らかにされた。なお、統制変数の中では、月収のセルフ・ネグレクトに対する負の関連性 ($-0.114, p < 0.05$) が、健康状態のセルフ・ネグレクトに対する正の関連性 (0.203, $p < 0.001$) が統計学的に認められた。そして自殺念慮については健康状態のみが正の関連性 (0.197, $p < 0.001$) を認めた。自殺念慮に対する説明率は 26.4% であった。

4. 考 察

急速な高齢化の進展に伴い、今後もセルフ・ネグレクト状態にある高齢者数の増加が予想される中、韓国ではセルフ・ネグレクトに対する予防が重要な福祉課題となっている。セルフ・ネグレクトは消極的自殺とも呼ばれ (Thibault et al 1999: 30-31)、不適切な衛生管理と健康管理だけでなく、極端なセルフ・ネグレクト状態は物屋敷あるいは誰にも看取られずに自宅で死亡する孤立死に至る危険性が非常に高い。なお、セルフ・ネグレクトが死亡率の増加に影響を及ぼすという報告もある (Dong et al 2009)。本研究では、これまでにほとんど明らかにされていないセルフ・ネグレクトと自殺の関連性を

実証的に検証することを目的に、韓国の A 市にある老人見守り基本サービスの遂行機関 3 箇所を利用する独居高齢者に対してアンケート調査を実施した。その結果をまとめると以下の通りである。

第一に、調査対象者の属性によるセルフ・ネグレクトと自殺念慮に対する有意差を検討した結果、月収と健康状態の程度で統計学的な有意差が確認された。セルフ・ネグレクトについては、月収が少ないほど ($F=4.54^*$)、また健康状態が悪いほど ($F=7.31^{***}$) セルフ・ネグレクト状態の程度が高く現れた。この結果は、経済的状态 (李ら 2014; 孫ら 2016) と健康状態 (Dong et al 2010) がセルフ・ネグレクトに影響するという先行研究の結果を支持するものと考えられる。自殺念慮については、月収が少ないほど ($F=5.72^{**}$)、また健康状態が悪いほど ($F=10.24^{***}$) 自殺念慮の程度が高く現れた。一方、セルフ・ネグレクトと自殺念慮について、性別と年齢による有意差は認められなかった。

第二に、高齢者のセルフ・ネグレクトと自殺念慮との関係を構造方程式モデリングで分析した結果、その因果関係モデルのデータへの適合度 ($CFI=0.940$, $RMSEA=0.055$) が統計学的に許容水準を満たした。高齢者の自殺念慮に対してセルフ・ネグレクトが統計学的に有意な正の関連性 (0.407 , $p<0.001$) を示し、セルフ・ネグレクト状態の程度が高いほど自殺念慮の程度も高くなることが明らかとなった。この研究結果は、極端なセルフ・ネグレクトの状態にある高齢者ほど自殺念慮を有する傾向がある研究 (Dong et al 2017) の結果を支持するものと思料される。なお、高齢者のセルフ・ネグレクトと自殺念慮の因果関係モデルに統制変数を投入した結果からは、月収が少ないほど (-0.114 , $p<0.05$)、健康状態が悪いほど (0.203 , $p<0.001$) セルフ・ネグレクト状態の程度が高く、健康状態が悪いほど (0.197 , $p<0.001$) 自殺念慮の程度が高くなることが明らかとなった。

2014 年にセルフ・ネグレクトの高危険群とみられる独居高齢者に対する見守り支援が「老人見守り基本サービスの事業案内」に位置付けられた。高危険群の独居高齢者と判断される老人見守り基本サービスの利用者に対しては、独居老人生活管理士による定期的な安否確認サービスなどが実施されることになっている。したがって、まずは、毎年独居老人生活管理士により実施される現況調査を通してセルフ・ネグレクトと自殺に至る可能性が高い高危険群高齢者を的確に把握することが重要となる。その上で、定期的な安否確認を通して利用者の日常的な様子を確認し、必要に応じては精密なスクリーニングや他機関連携を行うことが考えられる。そのためには、セルフ・ネグレクトに対する支援する側の共通理解を図り、多分野専門機関のネットワークの構築・強化が求められる。

本研究は、これまでの研究においてほとんど検証されていない高齢者のセルフ・ネグ

レクトと自殺念慮との関連性を検討した基礎研究として位置づけられる。そしてセルフ・ネグレクトと自殺念慮との有意な関連性が認められた本研究の結果から、高齢者の自殺問題を緩和するためにはセルフ・ネグレクトへの予防的介入が重要であることが示唆された。しかし、セルフ・ネグレクトに関する理論研究を始め、理論を基に仮説検証を行った学術論文は極めて少ないため（鄭 2019）、理論に基づいた仮説モデルの検証には限界がある。なお、本研究の分析結果では、セルフ・ネグレクトと自殺念慮の関連性が高い水準とはいえず、他の要因との関係やプロセスを明らかにしていく課題は残されている。本研究は韓国の A 市にある老人見守り基本サービスを利用する独居高齢者を対象に実施した研究であり、今後の日本での調査で同様の研究結果が得られるとは限らない。鄭ら（2019）の研究でも述べられているよう、日本語版のセルフ・ネグレクト尺度の妥当性と信頼性の検討とともに、高齢者のセルフ・ネグレクトと自殺念慮の関連性を実証的に検証することも課題である。

付記

本研究は、JSPS 科研費（課題番号 19 K 23259, 研究代表者：鄭熙聖）の助成を受けたものであり、研究成果の一部である。

参考文献（アルファベット順）

日本語

- 鄭熙聖（2015）「韓国における独居高齢者支援のあり方—老人見守り基本サービスの利用者と提供者へのインタビューを中心に—」同志社大学大学院修士論文。
- 鄭熙聖（2019）「独居高齢者のセルフ・ネグレクトに関する研究」同志社大学大学院博士論文。
- 鄭熙聖・孟浚鎬（2019）「高齢者のセルフ・ネグレクト尺度開発に関する研究」『厚生指標』5(66), 27-33.
- 川口一美・高尾公矢（2013）「団地における孤独死の発生と防止対策に関する考察—千葉県八千代市 A 団地の事例を手がかりとして—」『聖徳大学研究紀要』24, 17-24.
- 孟浚鎬（2018）「日本と韓国における高齢者の自殺予防福祉モデル構築に関する基礎的研究」同志社大学大学院博士論文。
- ニッセイ基礎研究所（2011）『セルフ・ネグレクトと孤立死に関する実態把握と地域支援のあり方に関する調査研究報告書』平成 22 年度老人保健健康増進等事業。
- 齊藤雅茂・岸恵美子・野村祥平（2016）「高齢者のセルフ・ネグレクト事例の類型化と孤立死との関連—地域包括支援センターへの全国調査の二次分析—」『厚生指標』63(3), 1-7.

韓国語

- 보건복지부（2012）『「독거노인」 더이상 혼자가 아닙니다!!』보건복지부 노인정책과. (=保健福祉部 (2012) 『「独居老人」これ以上一人ではありません!!』保健福祉部老人政策課.)
- 보건복지부（2017）『2017년 노인보건복지 사업안내 (Ⅱ)』. (=保健福祉部 (2017) 『2017 年老人保健福祉事業案内 (Ⅱ)』.)
- 중앙노인보호전문기관（2016）『2015 노인학대 현황 보고서』보건복지부 노인정책과. (=中央老人保護専門機関 (2016) 『2015 老人虐待現況報告書』保健福祉部老人政策課.)
- 이민홍・강은나・이재정（2013）「노인돌봄 기본서비스의 효과적 분석: 우울, 자기 방임, 그리고 사회적 관계망을 중심으로」『한국노년학』33(4), 787-803. (=李민홍・姜은나・李재정 (2013)

- 「老人見守り基本サービスにおける効果性の分析：うつ，自己放任，そして社会的関係網を中心に」
『韓国老年学』 33(4), 787-803.)
- 이민홍·박미은 (2014) 「한국 고령 독거 노인의 자기방임에 관한 연구」 『사회 복지정책』 41(1), 123-142.
(=李민홍·朴미은 (2014) 「韓国の高齢独居老人の自己放任に関する研究」 『社会福祉政策』 41(1), 123-142.)
- 손영은·이종화·남석인 (2016) 「저소득 독거노인의 부정적 자아상이 자기 방임에 미치는 영향과 우울의 매개효과 검증」 『한국사회복지조사연구』 50, 29-57. (=孫영은·李종화·南석인 (2016) 「低所得独居老人のネガティブなセルフイメージが自己放任に及ぼす影響とうつの媒介効果の検証」 『韓国社会福祉調査研究』 50, 29-57.)
- 통계청 (2014) 『2014 고령자통계』. (=統計庁 (2014) 『2014 高齢者統計』.)
- 통계청 (2019) 『2019 고령자통계』. (=統計庁 (2019) 『2019 高齢者統計』.)

英語

- Dong, X., Simon, M., & Evans, D. (2010) Cross-sectional study of the characteristics of reported elder self-neglect in a community-dwelling population : findings from a population-based cohort, *Gerontology*, 56(3), 325-334.
- Dong, X., Simon, M., Mendes de Leon, C., Fulmer, T., Beck, T., Hebert, L., Dyer, C., Paveza, G., & Evans, D. (2009) Elder self-neglect and abuse and mortality risk in community-dwelling population. *Jama*, 302(5), 517-526.
- Dong, X., Xu, Y., & Ding, D. (2017) Elder Self-neglect and Suicidal Ideation in an US Chinese Aging Population : Findings From the PINE Study, *Journals of Gerontology Series A : Biomedical Sciences and Medical Sciences*, 72(s 1), s 76-s 81.
- O'Connell, H., Chin, A. V., Cunningham, C., & Lawlor, B. A. (2004) Recent developments : suicide in older people. *Bmj*, 329(7471), 895-899.
- Thibault, J. M., O'Brien, J. G., & Turner, L. C. (1999) Indirect life-threatening behavior in elderly patients. *Journal of elder abuse & neglect*, 11(2), 21-32.

Relationship between Self-Neglect and Suicidal Ideation with Elderly Living Alone in Korea

Heeseong Jeong

The purpose of this study is to empirically verify the relationship between the self-neglect and suicidal ideation of Korean elders who live alone. Individual visiting research was conducted using surveys on elderly people who use organizations that provide basic care services for older adults living alone located in A city. Analysis conducted using a structural equation model on the relationship between the self-neglect and suicidal ideation of Korean elders who live alone showed that the structural model of this study fit ($CFI = 0.940$, $RMSEA = 0.055$). With regard to the suicidal ideation of the elderly, self-neglect had a statistically significant positive correlation ($.407$, $p < 0.001$) and stronger states of self-neglect led to higher levels of suicidal ideation. In the study, discussions were made regarding the importance of self-neglect prevention in relieving the suicide problems of the elderly based on the research results.

Key words : Korean elders who live alone, Self-neglect, Suicidal ideation, Structural equation model